災害看護 Disaster Nursing Global Leader Degree Program

グローバルリーダー養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.4

4月 2017

CONTENTS

- Message from the Program Director, DNGL International Seminar in Tokyo 2016 ・・・ 2
- Enrolled Student Voice ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- Message from teachers, Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN) ・・・ 8

高知県立大学 University of Kochi　公立大学法人 兵庫県立大学 UNIVERSITY OF HYOGO　TMDU 東京医科歯科大学　千葉大学 CHIBA UNIVERSITY　日本赤十字看護大学

「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」は、我が国初の国公私立５大学院からなる共同大学院です。

Message

プログラム責任者からのメッセージ

近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震の可能性、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなど未曾有なものへの対策も急務であり、その為には、国際力、学際力を備えたイノベーティブな人材育成が必要です。そこでこれまで災害看護学を牽引してきた高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の国公私立の5大学院が一丸となり、人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的・学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組んでいます。

皆様方には、本プログラムの災害看護教育・研究の活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

プログラム責任者　高知県立大学　南　裕子

2016 年度 DNGL 国際セミナーと学生自主ゼミの開催

2016年11月26日に日本赤十字看護大学に於いて「災害マネジメントの課題～近年の巨大災害からの教訓～」というテーマでDNGL国際セミナーが開催され、元国連事務総長特別代表 Margareta Wahlström先生、日本地域開発センター総括研究理事 西川智先生、前日本赤十字九州国際看護大学学長 浦田喜久子先生にご講演いただきました。このセミナーを通して、減災・防災分野における多職種との分野横断的な連携についてグローバルと国内の視点の双方から看護職がどのようにリーダーシップを発揮することが期待されるのかについて学びました。翌日は講師の先生方とDNGL 5大学の学生によるワークショップ形式の学生ゼミを実施し、学生個々が今から始めるチャレンジを明確にしながら学びを深めました。

ネパールでのインターンシップ

今回、ネパールの国内避難キャンプで活動を行っている現地の看護師に同行し研修を行いました。住民の血圧測定、個別訪問を行うなかで、長期化する避難生活から「鬱」や「再定住」という問題を抱えていることが分かり、活動の振り返りを行いながら看護として何ができるのか模索しました。また、キャンプ内のトイレや衛生状況のアセスメントも行い、安全に健康に暮らすことができるようにアドバイスを行いました。今回の研修を通し災害看護として、個人から家族、そして集団から地域へと視野を拡大し、それぞれの対象者に応じた支援活動を考え展開していく必要性を感じました。そして同時に、国内避難キャンプでの看護の役割として、「災害サイクルの特徴を踏まえた活動」「看護の多様性」「コーディネーション」「生活復興支援」の4つの視点についても学ぶことができました。

災害看護学実習Ⅰ

災害後の中・長期的な時期における災害サバイバーの生活と健康問題・課題を理解し、必要なケアを提供し、ケア提供に係るさまざまな連携・調整を学ぶことを目的に、2年次の夏に実習を行っています。2016年度の実習では、東日本大震災の被災地や阪神・淡路大震災の影響がまだ残る神戸で、被災者を支援している団体や機関の看護職などと共に家庭訪問や健康相談等の支援活動に参加したり、意見交換をさせていただいたりといった活動を通して実践的に学びました。

災害医療学で学んだこと

DNGLに入学する以前から、災害研修に参加してきましたが、改めて基礎から災害医療について学びたいと思い、この講義を取りました。概念や歴史、急性期の災害医療、そして放射線に関すること等、幅広い内容であるとともに、災害時の医療支援における経験豊かな先生方から実践を交えたお話を聞くことができました。なかでも被ばく医療に関しては演習を交えた講義であり、興味深いものでした。実際に床や壁を汚染しないように専用のシートやテープで養生し、作業する場所を作り、防護服を着脱する等を体験しながら学びました。この他にも災害関連死などについても事例や現状を学び、長期にわたる被災者の心的苦痛を再認識できました。この学んだことを他の教科と統合し、よりよい災害支援となるよう実践力をつけていきたいと思います。

災害時専門職連携演習を行いました

2016年度後期の授業である「災害時専門職連携演習」のうちの集中演習が、2017年2月27日～3月1日の3日間、千葉大学の亥鼻キャンパスで行われました。DNGLの学生6名に加え、千葉大学大学院園芸学研究科、理学研究科の学生も加わり総勢12名の学生がシミュレーション演習に取り組みました。

避難所運営ゲーム（HUG）を使ったアイスブレイクから始まり、水害対応をする常総市災害対策本部、水害後1年半が経過した地域住民の街づくりワークショップを題材に、災害の様々な局面で、多機関と連携して、またチームとして活動する体験をしました。警察、消防、自衛隊、自治体、宗教家、災害派遣の看護師、地域住民など多くの協力をいただき、臨場感溢れる演習となりました。学生達は、シミュレーションでのタスクを達成しリフレクションすることで、リーダーシップ、メンバーシップ、コミュニケーション、連携に必要な態度などを学びました。

災害看護活動論演習Ⅰ（福島県での集合授業）

2017年1月30日～31日にかけて、1年生8名と教員2名が、長崎大学の福島芳子先生のご支援をいただき、原子力災害をテーマとして福島県で集合授業を行いました。初日は、福島県立医科大学を訪れ、同大学医学部放射線災害医療学講座の長谷川有史教授らのご指導のもと、被ばく医療演習として、空間線量測定、放射線汚染および被ばく者への緊急医療対応を学びました。その後は、昨年6月まで村の一部が避難区域であった川内村を訪れ、役場で隣町からの住民受け入れや、当村から近隣町村への住民避難対応をされた当時の担当者の方との対話を通して、原子力災害がもたらした長期的で複雑な問題や、住民の方々の苦悩、今後の課題を知ることができました。翌日は、2017年4月に避難住民が帰還予定である富岡町を訪れ、今も残る津波や原子力災害のもたらした甚大な被害状況を目の当たりにし、長期的な支援ニーズの重要性を再認識するとともに、存在する様々な困難について学びました。

緊急被ばく者対応のシミュレーション

富岡町から福島第１原発を望む

Enrolled Student

在学生の声 Voice

高知県立大学 University of Kochi

佐々木　康介

災害拠点病院で勤務していたこともあり、DMATなど急性期での活動について学ぶ機会はありましたが、その他の時期での取り組みについて学ぶ機会はありませんでした。大学院入学後は、中長期での看護職や行政の役割、防災や減災の取り組み、災害心理や環境防災、専門職連携などさまざまな角度から災害を勉強することによって、少しずつ視野が広がっていることを実感しています。また、海外の先生や学生との交流、語学研修や海外での学会への参加などを通して国内だけではなく、海外の文化や価値観を知る貴重な機会を得ました。学部生時代は高知で過ごしており、再び高知に戻ってくるチャンスをいただけたことを大変嬉しく思っており、「高知家」の一員として災害看護について学びながら、グローバルリーダーとしてどのような活動ができるのかを考えていきたいと思います。

千葉大学 Chiba University

千葉大学 CHIBA UNIVERSITY

鈴木　聡子

災害現場での経験から、さらに学びを深めたいと考え、DNGLプログラムに入学しました。災害看護や災害医療の専門家から学びたいことを存分に学べること、研究したい課題に取り組むことは、刺激的で大変充実した毎日です。今後はプログラムで得た多くの学びを地域の人や世界中の人々に還元できるように自己研鑽していきたいと考えています。

塚田　祐子

千葉大学看護学部在学中に1年間休学し、東日本大震災後の宮城県石巻市で看護団体のサポート等の活動をした経験から災害看護に興味を持ち大学院に入りました。

DNGLプログラムでは、他学問分野の専門家からの講義、他国の災害看護を志す院生とのディスカッション、大学外で防災に取り組む市民の方との関わりなど刺激的で充実した日々を過ごしています。

今後も災害看護に何が求められているのかを常に問いながら、自分が学んだことを世界に還元し、人間の安全保障を確実に実現することに貢献していけるように努力を重ねていきたいと思います。

兵庫県立大学 University of Hyogo

Eni Nuraini Agustini

Joining DNGL Program is one of my dreams. Coming from Indonesia, I had a dream to learn about disaster mental health nursing since my background is mental health nurse. The lectures and practices at DNGL Program are interesting and academically stimulating, moreover it is applied to real-world case studies which is extremely useful. The Education program at DNGL program encourages, and supports me to learn many things in disaster health management from many perspectives. At DNGL Program I had various opportunities to attend many classes delivered by experts in disaster from UN, WHO, UNDP and all over the world. Those opportunities added immense value to my life.

山村　奈津子

人の健康増進や疾病予防に寄与する社会システム作りに興味があり、都道府県の行政保健師をしてきました。その中で、東日本大震災の被災地支援や管内での豪雨災害対応を経験し、災害に関する知識の乏しさと、行政機関の健康危機対応を強化していく必要性を感じ、DNGLへ入学しました。この1年間、授業以外にも自治体の避難訓練や被災地支援、地域での減災啓発など様々な活動を経験し、災害と人の健康について学びを深めるとともに、多様な関係機関が連携・協働していくことの重要性を感じました。今後も、世界や世界の中の日本に目を向け、学際的な研究力と実践力を備えた専門家を目指していきたいと思います。

日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing

青山　都弥子

私は東日本大震災において災害支援ナースとして活動し、その経験から災害看護に深く興味を持ち、DNGLへの進学を決めました。入学直後、熊本地震が発生し、情報収集や支援のあり方、支援評価についてゼミや講義、そして現地での実際の支援活動を通して系統的に学びました。また、学生が主体となって企画運営を行ったセミナーでは、調整や交渉など多くの人々の意見をまとめていく難しさから自身の力不足を痛感するとともに、リーダーシップ・メンバーシップ、連携とは何かを考える機会となりました。現在、実践における疑問を研究的な視点でとらえ、いかに被災者の健康を守っていくのか仲間と支え合いながら共に模索する毎日です。今後も実践に反映できるような視点や研究力を高めるため、日々学びを深めていきたいと思っております。

藤井　直樹

私は、阪神淡路大震災での被災経験や大学生の頃の水害ボランティア活動に参加した経験から災害に興味を持ちました。本専攻を選んだ理由は、災害看護学と修士で学んだ感染看護学の知識を統合させ、それらの知識を国内外で起こった災害時の感染症やパンデミックの対応等に活かしたいと思ったからです。この一年は大学院の講義や演習に加え、国内外の学会や熊本地震での災害支援活動に参加し、とても忙しい日々でしたが、非常に多くのことを学ぶことが出来ました。このように恵まれた環境で学べることに感謝しつつ、日々研鑽していきたいと思っています。

東京医科歯科大学 Tokyo Medical and Dental University

谷本　美保子

在職中はリーダーシップとは何か、マネジメントとはどういうことかについて模索する日々を送っていました。また、東日本大震災時救護班として待機をしていましたが、結局後方支援に留まったその思いも重なり、DNGLへの入学を決めました。入学してからは、災害の最前線でご活躍されている先生方からのご講義や多くの方々との出会いなど、貴重な機会を沢山頂いていることに日々感謝をして過ごしています。私は、助産師でもあるため、お母さんと子ども達またそれを支えるご家族が、国内外問わず災害時でも安心して暮らせる世の中に出来るよう尽力していきたいと考えています。

友藤　裕美

正直、「5年制の大学院」と聞いたとき進学自体に非常に悩みました。5年があったら一体何が出来るのだろう、5年を経て何を残せるのだろうと不安になりました。入学してからはまさに怒涛の様に過ぎていく日々で、医療についてだけではなく多岐にわたる分野の、まさにスペシャリストな先生にコアに学ぶ刺激的な生活を送っています。また多くの人に災害看護学とは一体何をするのですかと聞かれます。この5年間は自分の中の「災害看護」を自問し「何か」を作り上げていく大きな機会であると捉えています。そしてその「何か」が自治体・病院に限らず企業なども含めた、多くの人に「安心」と「安全」を提供できる糧となるよう日々研鑽していければと思います。

熊本地震災害支援活動

高知県立大学のDNGL学生は、熊本地震発生後の4月26日～5月5日にかけて熊本県御船町保健センターで活動を行いました。御船町では1,500棟以上の建物が被害を受け、被災された方々は度重なる余震に怯えながら、避難所や車中での生活を余儀なくされていました。被害の全容が明らかになっていない中で、私たちは指定避難所の訪問、災害派遣保健師とともに地域の被災状況の把握や要支援者の自宅訪問を行いました。昔からこの地域で住んでいる人が多いことによって、コミュニティが形成されており、発災直後から住民同士の共助による活動が行われていました。被災状況は区長や民生委員などを通じて把握し、支援が必要とされる方の自宅訪問では血圧測定や話を伺う中で健康状態を把握し、必要な情報は関係者と情報共有することで継続した支援へと繋げました。今回の経験から平時からのコミュニティ作りの必要性と他機関と連携しながら活動を行うことの重要性を学びました。

世界災害看護学会

2016年9月29日～30日にインドネシア・ジャカルタで開催された世界災害看護学会に参加しました。2016年5月に行った熊本地震時支援における「避難所カフェ」の運営支援と、カフェで記録された被災者の発言を分析・考察し、そこから得られた知見について口頭発表しました。避難所カフェという概念は、インドネシアにはなかったようですが、避難所カフェにおけるコミュニティリーダーの役割や、看護師の関わりについてディスカッションを通じて相互理解を得ることが出来ました。また、その他の講演やパネルディスカッションでは、災害看護の研究をどのように実践に繋げていくか、仙台フレームワークにおいて看護がどのように貢献していけるのかについてディスカッションし、各国の取り組みや、教育のプログラムについて理解を深めました。

第１回　防災推進国民大会

2016年8月27日～28日に東京大学本郷キャンパスで実施された、内閣府主催の第1回防災推進国民大会に学生5名が参加しました。「いのちとくらしを支える災害看護-地域をつなげる防災へのチャレンジ-」というテーマで、主に南海トラフ地震、首都直下地震への備えについて学術的視点を交えながら、今後の災害看護としての展望やDNGLの取り組みを発信しました。看護職だけではなく、一般の人に向けた減災・防災イベントであるため、学生たちは災害看護とは何かということから分かりやすく説明し、DNGLの紹介や各学生が行っている減災に向けた活動などを紹介しました。様々な背景を持つ参加者と意見交換を行い、災害時に遭遇するジレンマ事例や、日頃の個人の備えについて学問や領域を超えた交流が実現しました。参加者からは「刺激を受けた」「看護が何をしているのかわかりやすかった」などの声が聞かれました。

地域住民の方々への防災啓発活動

災害看護を学び研究する私たちは看護の立場から、大学祭や地域イベントなどの機会を使って、地域住民に向けて“災害への備え”に関するさまざまな啓発活動を行っています。2016年度は、5月には兵庫県立大学明石看護キャンパスで開催される“欅まつり”で、避難所生活と非常持ち出し袋の体験コーナーを作り、参加者には体験を通して避難生活をイメージして災害に備える重要性を考えてもらいました。11月には、小学生を対象に避難袋の中身を考え備える学習イベントを行いました。また、1月には、阪神・淡路大震災のメモリアルイベントとして開始される「ひょうご安全の日のつどい」に参加し、熊本地震やこれまでの支援活動を通して感じた避難生活の困難を題材に、課題解決を一緒に考える「避難生活の実際って？」と題したブースを設けました。このような活動を通して、私たちも地域住民の方々と災害への備えについて一緒に考え、多くのことを学んでいます。

教員からのメッセージ

Message

課題にチャレンジし続けるDNGL

東日本大震災から6年、3.11が近づくと、被災当時のことが思い出されます。不思議と身体が覚えています。DNGLも開講から4年、5年制の博士課程は、長いと思っていましたが、始まってみると月日は駆け抜けていきます。最上級生は、Qualifying Examinationや博士論文へと進み始めています。2017年度は4人の留学生を迎えることになっており、私も英語の資料作りに悪戦苦闘の日々です。でも新しく創造的なことに果敢に挑戦し続けるのがDNGLです。高知県立大学DNGLの活動は、南海トラフの防災・減災対策を基に、インドネシア、ネパール、フィリピン等、広がりつつありますが、私自身は福島県の放射線災害を原点に、原発事故のためにかけがえのない土地を奪われた被災者のこころの痛みを記録していく活動に取り組み続けていきたいと思っています。

高知県立大学特任教授
中山　洋子

研究と実践を通しての「災害看護学」の専門性を修得し、新たな課題へ

2期生が実践課題レポートに取り組み、自身の“災害看護”の専門性をより深化させると共に生涯を通じて探求するテーマを見出したように思います。1期生はその過程からさらに発展させて博士論文の研究計画に臨んでいます。

2016年4月に発生した熊本地震ではDNGL各大学の院生が現地にて支援活動を行いました。被災者の方々へのケアにあたりつつ、リーダーシップを発揮して支援の企画に参加したり、現地での助言を行うことができたようです。

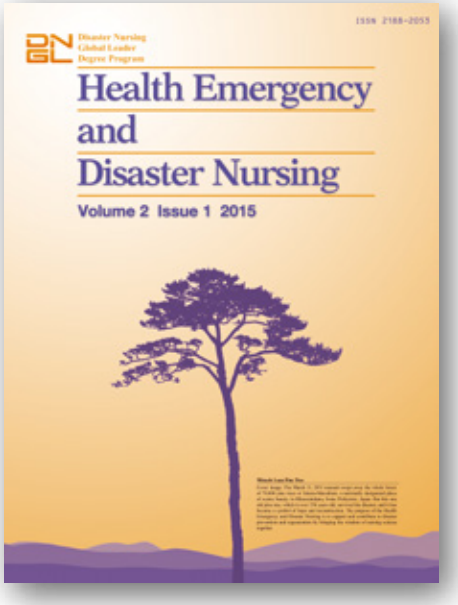
また、昨年度、千葉大学では「難民支援セミナー」をシリーズで開催しました。難民問題を通して「人間の安全保障」を“看護”で具現化していく新たな取り組みを始動させています。常に院生の皆さんと新しい課題にチャレンジしていきたいと思います。

千葉大学特任准教授
伊藤　尚子

HEDN について

世界初、
災害看護国際学術雑誌HEDNスタートし4年が経ちました!

看護職は災害の現場において、発災直後から復興に向け、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、幅広く活動してきました。そこで災害看護の知を集積し世界へ発信するために世界初の災害看護国際学術雑誌Health Emergency and Disaster Nursing(HEDN)を立ち上げ、すでに４年が経ちました。HEDNはオンラインをベースとしたジャーナルで、投稿、掲載料は無料です。

災害看護の知を結集し、リアルタイムの情報を発信するため、教員、研究者、臨床家、学生、活動家など、様々な場で尽力する方々の原稿を募集します。

詳細は　https://hedn.jp